大藪 泰著：　博士（文学）学位申請論文
「乳幼児のジョイント・アテンションの研究－新生児から 2 歳 6 か月までの発達過程－」
に関する審査報告要旨

「子どもはジョイント・アテンション（Joint attention）の能力を獲得することを通じて、他者および物との間で様々な社会的相互作用が可能になる。ジョイント・アテンションには、生物としてのヒトのココロを文化化された人間の心に変容させる働きがあり、人間化の原点である」という立場に立脚して書かれた本論文は、乳幼児のジョイント・アテンションに関する国内外の主要な研究知見や著者自身の多岐にわたる実験や調査を駆使した労作である。

本論の特色と独創性は、乳幼児のジョイント・アテンション行動を形態と内容から 5 つの発達層に分類し、それらがもつ特徴を明らかにしたところにある。分類に際しての著者の基本的観点は、次の 3 つに要約される。

第 1 に、乳幼児のジョイント･アテンション行動の発達を、実験室場面での行動の量的データと、日常生活場面でのコンテクストを絡めた質的データの両面から統合的に理解することを試みている。第 2 に、ジョイント･アテンション行動を他者の視線を追って視覚的対象物を見るという行動に限定せず、聴覚的刺激を含む広範囲な対象に広げ、より実態に即した知見を用いている。第 3 に、以上の 2 つの観点から得られた知見を統合して、新生児期から 2 歳半までのジョイント･アテンションの発達を理論化している。

第 1 章では、ジョイント・アテンション研究に関する歴史的端緒と膨大な研究の経緯を分析して紹介し、その流れの中での本研究の位置付けを明らかにしている。

第 2 章では、ジョイント・アテンションを類別し、「構成形態」「出現形態」「感覚様相」の 3 つの観点から分類し、そこに登場する行動を概説している。

第 3 章では人間と類人猿のジョイント・アテンションに触れ、人間のジョイント・アテンションの特徴が考察されている。

第 4 章では、新生児期を中心として生後 2 ヶ月間の母子融合期を扱っている。この時期ではジョイント・アテンションの存在は希薄であるため「プレ・ジョイント・アテンション」と命名し、母子が関与しあう瞬間を確立し共有する過程を論じている。

第 5 章では、母親と相互に同調しあう体験を重ねた新生児が生後 2 ヶ月になると行動態勢を大きく移行させる時期を迎えること、この移行期から数ヶ月間、乳幼児と母親は対面しながら注意を結びあう焦点を確保することに注目し、この関係を「対面的ジョイント・アテンション」と命名している。また、母親が乳児との一体化した関係を変化させ、関心を子ども以外の社会にも広げて行く過程に対応して、乳児のジョイント・アテンション行動も母親との対面的空間の外側に向かって開かれていく、つまり「母子の分化」は母と子の両者に同時に生じるという新しい発見を報告している。

とくに本章の第 5 節では乳児に特有の「あお向け姿勢」が持つ機能を分析し、乳児が自分の顔の前の空間に静観的な「結節点」を作り出せること、母親もまたこれを利用してこの結節点に物を頻繁に登場させることを指摘している。対面的場面こそが人間のジョイント・アテンション行動の原型であり、著者が「対面的ジョイント・アテンション」という発達層を新たに設けた論拠になっている。

第 6 章では、生後 6 ヶ月を過ぎる頃から乳児が母親との対面的関わりを避け、身のまわりに視線を向けることが多くなることを指摘している。乳児と母親の 2 人は対面的空間の外側で対象物にジョイント・アテンションをすることが多くなり、対象物を共有しようとする母親の働きかけがジョイント・アテンション場面を維持することから、この時期を「支持的ジョイント・アテンション」と命名している。

第 7 章は、他者に視線を向け自らの注意を能動的に配分しながら、他者と対象物を共有しようとする乳児の行動を「意図共有的ジョイント・アテンション」として論じている。また視覚刺激と聴覚刺激についての考察も行なわれている。

第 8 章では、生後 15〜18 ヶ月頃までに言語的シンボルを理解し使用しはじめる子どもは、目前の対象物とともに対象物を指示する言語的シンボルをも共有するようになることを挙げ、これを「シンボル共有的ジョイント・アテンション」と位置づけている。「不在対象」へのジョイント・アテンション行動に関する著者の実験データは綿密かつ詳細であり、新たな視点を開いている。

乳幼児のジョイント・アテンション行動について量的データと質的データを可能な限り利用し、その発達の経緯を詳細に論じた本論文は「探索的研究」の域を超えており、このテーマについて画期的なものである。著者が最終章で述べている今後の研究課題への拡がりも含めて、さらなる発展が期待される。

以上により、本論文は博士学位論文としての内容とレベルを満たしており、博士（文学）の学位を授与するに相応しい論文であると認められる。

２００３年7月２８日

主任審査委員　西本武彦　（早稲田大学教授）
審査委員　深澤道子　（早稲田大学教授）
審査委員　根ヶ山光一（早稲田大学教授）
審査委員　板倉昭二　（京都大学助教授）

以上